（別紙３）

公表　事業所における自己評価総括表（児童発達支援）

○事業所名	児童通所支援事業所　あいらいく			
○保護者評価実施期間	2024　年　11　月　1　日	～	2024　年　12　月　31　日	
○保護者評価有効回答数	（対象者数）	0	（回答者数）	0
○従業者評価実施期間	2024　年　12　月　19　日	～	2025　年　1　月　17　日	
○従業者評価有効回答数	（対象者数）	6	（回答者数）	6
○事業者向け自己評価表作成日	2025　年　2　月　20　日			

○ 分析結果

	事業所の強み（※）だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的に行っている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	環境体制整備及び適切な支援の提供の中で、職員配置を適切に行い、こどものことを十分に理解し、こどもの特性に応じた専門性のある支援を行うことができる。 看護職員及び専門職（療法士）の配置	・こどもの状態を日報の振り返りや保護者からオン情報をもとに職員間での情報共有を行っている。 ・学校の先制や保護者と送迎時に児童の状態の確認を行うことができている。（医療的ケア、最終排尿の情報等） ・病院等のリハビリ計画書等を保護者から受け取り、事業所での支援に取り入れるようにしている。	・専門的支援計画書を作成し、計画に沿った専門的支援を行っていく。 ・児童の状態に対して、病院からの情報提供を受けるために連携を図っていく。（保護者を通して、さらに詳しい情報を確認することができるようにしていく） ・医療艇ケア児の対応に際して、どのようなリスクがあるのか全職員で共有し、対応ができるようにしていく。（リスク管理、報連相、情報共有等の声かけの徹底）
2	適切な支援の提供の中で、こどものことを十分理解し、こどもと保護者のニーズ等を盛り込んだ個別支援計画の作成を行い、計画に沿った支援を行っている。また、活動や遊びの内容をそれぞれの状態やレベルに応じて対応することができている。	・5領域をローテーション化し、重ならないようにテーマを考えている。また、活動の内容に関しては、職員同士で話し合いを行い決めている。 ・プログラムの立案の時には、曜日や児童の状態に合わせて難易度の調整を行っている。1度実施した内容の活動でもルールの変更などを行い、満遍なく取り組むことができるようにしている。 ・職員同士で5領域を活かしたプログラムの話し合いを行うことができており、自分が担当でない場合でも積極的に声かけを行い協力して取り組むことができている。また、こども達の反応を踏まえて、次の活動に反映させるようにしている。	・振り返りなどの話し合いは午前中に行っているが、パート勤務などで参加できない職員に対して、内容が決まってから情報共有している状態の為、検討段階での情報共有を行い、よりよい支援ができるようにしていく。 ・活動等で意見を伝えてくれる児童もいるため、児童の意見を主体的に取り入れていくことでもっと楽しく取り組むことができるようにしていく。
3	適切な支援の提供の中で、日々の支援に対して記録をとることを徹底し、支援の検証、改善につなげることができるようにしており、保護者にも丁寧に伝えることができるように取り組んでいる。また、保護者のニーズに合わせた対応として、児童の受け入れ（時間や曜日等）や送迎の有無及び時間などを柔軟に対応することができている。	・送迎時等、その日にあった出来事は保護者にちょっくせつ伝えるようにしている。児童の反応に対しての対応策などを伝えるようにしている） ・普段から保護者とのコミュニケーションを密に行うことで、柔軟に対応することができるようにしている。 ・何かしらの要望（困りごと等）があった時に、職員全体で話し合いを行い、改善策を実践することができるように意見のすり合わせを行っている。	・送迎時の伝達、HUG（個別の記録）を読んでの反応等を通してやり取りを深めているが、あまり話をされなかったり、記録をあまり見られていない保護者と野情報共有や保護者以外の家族（祖父母等）等の過程状況に合わせた情報共有の手段の模索が必要。

	事業所の弱み（※）だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	事業所として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等
1	事業所内での活動が主となってしまっており、地域との関わりが少ない。また、事業所がある建物内の他店舗との協力関係を結ぶ必要がある。 避難訓練等の近隣住民との協力等	・医療的ケア児がいることもあり、外出等の設定が難しく先延ばしになってしまっていた。（導尿等の時間が決まっているケアが必要なため） ・避難訓練等については、児童を含めて近隣住民の協力をもらう訓練をどのように実施していけばいいのか計画を練ることができていなかった。	・避難訓練については、リスクを考えつつ、児童を含めて訓練の段階をスモールステップで実施し、最終的には全体を通して取り組むことができるようにしていく。 ・地域の施設等の見学や福祉運動会等のイベントへの参加に取り組んでいく。 ・外出（公園等での活動）等の活動で他の児童との関わりが発生する場合には、状況をしっかりと把握したうえで、こども同士の関わりを持つことができるように取り組む。
2	今まで、中学生から高校生、高校生から社会人への移行がなかったこともあり、下校時間が遅くなった場合の支援時間の確保及び支援内容をどのようにしていくべきか。 また、事業所終了の設定や区切の付け方をどのようにしていくべきか。	・今まで利用していた児童の終了の目安については、保護者の要望等での終了が主であった。児童によって、終了の目安が違うことで把握することができていなかった。	・中学生及び高校生の受け入れについては、児童の状態に応じて、支援時間の確保及び支援内容の検討が必要。 ・事業所利用の終了の目安については、自宅での留守番ができる状態と考え、そのために必要なスキルを検討し、身に着けることができる支援に取り組んでいく。
3	児童発達支援の受け入れを小集団を主として取り組んでいたが、現在、登録児童がいない状態である。 今後は、個別支援を主としつつ、少人数のグループでの活動等を行っていく必要がある。	・今まで小集団での支援を主として行ってきていたが、個別支援で取り組むことがほとんどなかった。 ・保育園、幼稚園、こども園等の大きな集団の中での困りに対して、小集団の中での支援をうまく活用することができていなかった。 ・療法士等の専門的支援ができる職員がいるのに情報として積極的に発信していなかった。	・児童の特性に応じて、専門的支援をしっかりと行うことができるように体制を整え、積極的な受け入れができるようにしていく。 ・児童発達支援だけでなく、放課後等デイサービスの児童を含めて、集団での関わりを学ぶ機会を作り、個別活動だけでなく集団活動にも取り組むことができるように環境を整える。